

第1部 黒髪町遺跡群熊本大学構内黒髪南地区調査報告



調査風景 2021/9/18

一 位置と環境

1. 地理・地質的環境

熊本大学構内遺跡の位置 今回調査を実施した黒髪町遺跡群熊本大学構内黒髪南地区は、熊本市中央区黒髪2丁目に所在する。熊本市を含む熊本平野は北西の金峰山、北の立田山、東の阿蘇外輪山に三方を囲まれた半盆地的な地形を呈す。熊本平野には白川が流れている。本調査地点は白川河口より約12kmの地点に位置しており、白川によって運ばれた土砂に由来する自然堤防上に立地している。

本遺跡の所在する熊本市は、冬は冷え込み夏は蒸し暑い内陸型気候である。梅雨にあたる6・7月は降水量が多く、8～10月にかけては台風が発生しやすい。熊本平野の地質層は変成岩類や御船層群、先阿蘇火山岩類、阿蘇火砕流堆積物および火砕流間堆積物の層、保田窪砂礫層、沖積層の順に形成されている。変成岩類や御船層群、先阿蘇火山岩類などの新生代第四紀より前に堆積した層は水理地質基盤として分布している [横山・渡邊 1998 : p. 132]。その上位には砂礫、砂、粘土の互層からなる未区分洪積層、阿蘇-3火砕流堆積物、再び未区分洪積層の順に存在し、未区分洪積層が阿蘇-3火砕流堆積物を挟んでいる。さらにその上位には、阿蘇-4火砕流堆積物が存在する。阿蘇山は27～9万年前の間に4度の噴火を起こしており、熊本平野には阿蘇火山由来の火砕流堆積物が堆積している。約9万年前の阿蘇山の噴火によって広く堆積した阿蘇-4火砕流堆積物は、流紋岩質の軽石塊、石質岩片およびそれらの細粒物質で構成される。これらの阿蘇火砕流堆積物、火砕流間堆積物は帯水層を形成している [横山・渡邊 1998 : p. 132]。



第1図 熊本平野北部の地形

一 位置と環境

熊本平野には、白川によって形成された河岸段丘が分布している。白川右岸の龍田町～黒髪町付近、白川左岸～木山付近にかけて分布する河岸段丘面は保田窪面と呼ばれ、段丘堆積物は巨礫を含む安山岩質の砂礫層である。その砂礫層上には沖積層が堆積している。沖積層には厚い火山灰層が含まれており、下から褐色層（赤ボク）、始良 Tn 火山灰層、黒土層（黒ボク）の順に火山灰層を構成する。

（岡本）

2. 歴史的環境

縄文時代 黒髪町遺跡群では、縄文時代の文化層が広い範囲で確認されており、多くの遺物が発見されている。熊本大学埋蔵文化財調査センターによる 9810 調査地点の調査では、縄文時代から近世にかけて幅広い年代の遺構・遺物が多数確認されている。そのため、9810 調査地点の周辺が黒髪町遺跡群の中心的集落であったことが指摘されている〔熊大埋 C 報 2021〕。0302 調査地点の調査では、当時地山と考えられていた土層から縄文時代早期の押型文土器や条痕文土器が出土している。その後の調査では、古代の包含層や地山と想定されていた土層から縄文時代後・晩期の土器が少ないながらも発見されている。2013・2014（平成 25・26）年度に行われた 1310 地点の調査では、地山と想定されていた土層の下部から出水式土器や御手洗 A 式土器などが含まれる縄文時代後期前葉の文化層が発見された。また、同調査で配石墓に埋葬された縄文人骨が 3 体発見され、1310 調査地点の周辺が墓域であった可能性が指摘されている。〔熊大埋 C 報 2013〕

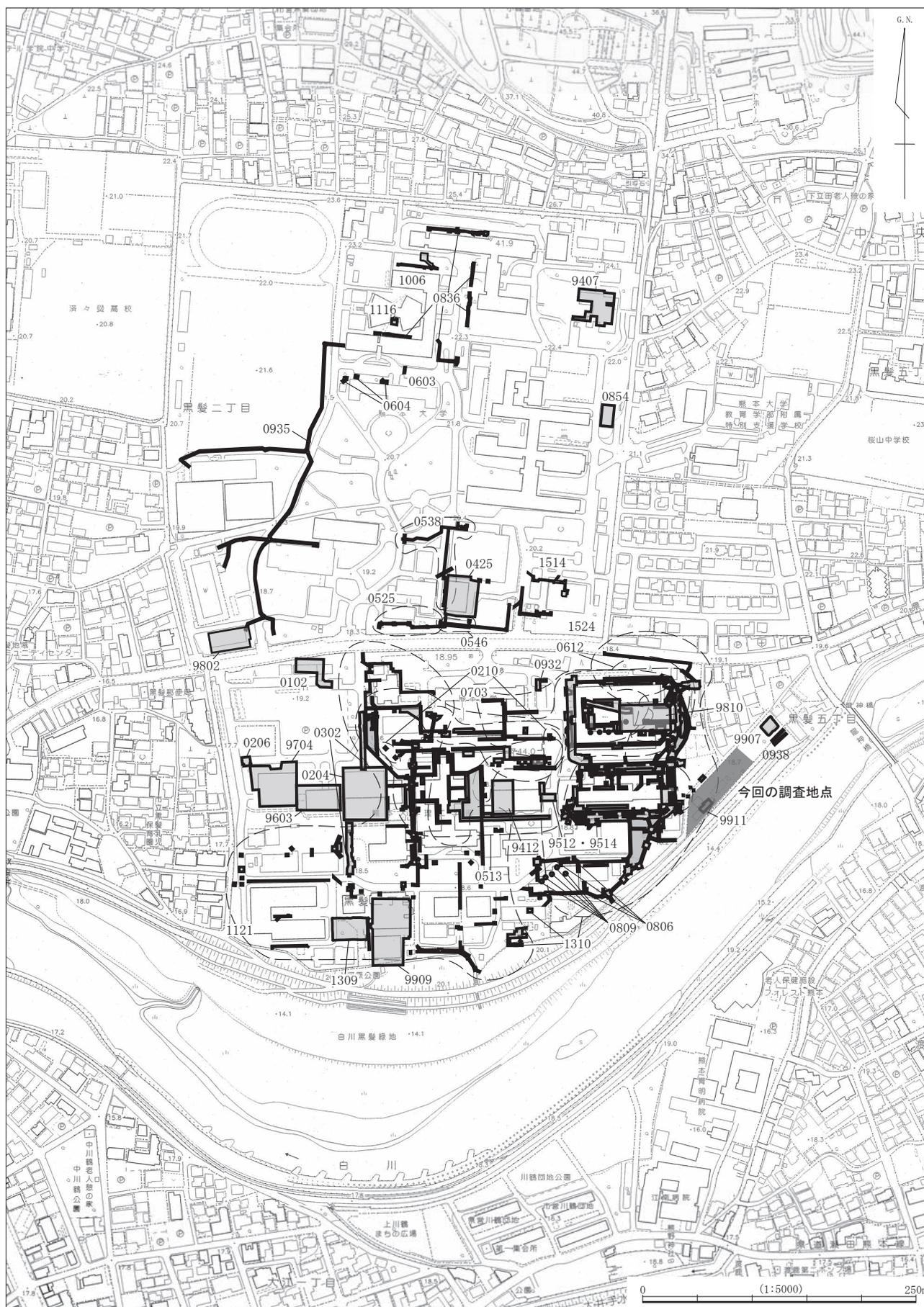
弥生時代 熊本大学に隣接する熊本県立中学済々黷（現済々黷高等学校）・九州女学院（現ルーテル学院中学・高等学校）、黒髪南地区の北西から黒髪式土器や須玖式の弥生時代の甕棺などが発見されている。このことから、熊本大学構内も含めて本遺跡群には、弥生時代中期の墓域が広範囲にわたり存在することが判明している。また、本遺跡群は中九州に主として分布する弥生時代中期の黒髪式土器の標識遺跡でもある。

古墳時代 本遺跡群では、九州女学院敷地内で古墳時代の須恵器甗が発見されている。本遺跡群の東側に位置する立田山南麓部には、宇留毛小磯橋際横穴群やつつじヶ丘横穴群が所在する。これらの横穴群は古墳時代後期から終末期の築造と推定されている。

古代 熊本大学構内において奈良時代末期から平安時代初頭とみられる竪穴住居跡、土師器、須恵器、黒色土器が発見されている。土師器は墨書のあるものや回転ヘラミガキが施されたものが出土した。この地域は『延喜式』に記された西海上の蚕養駅、および旧飽田郡家の推定地である。熊本大学埋蔵文化財調査センターによる 9603 調査地点の発掘成果や、掘立柱建物群の存在から、構内に蚕養駅の駅家があったことが推定されている。また、熊本大学黒髪北地区や南地区からは古代の竪穴住居跡や掘立柱建物址が見つかっており隣接する済々黷高校から熊本大学北地区が飽田郡司建部公の居館であり、その周辺に集落が広がっていたと推定されている。

近代 熊本大学黒髪北地区には 1890（明治 23）年に第五高等中学校・高等学校、黒髪南地区には 1906（明治 39）年に熊本高等工業学校が設立された。黒髪北地区の五高記念館や化学実験場、正門、黒髪南地区の工学部研究資料館はいずれもレンガ造りで、国の重要文化財に指定されている。南地区の本部棟は大正期の初期の鉄筋コンクリート建築で、登録有形文化財となっている。また、1309 調査地点では熊本監獄関連遺構として、明治・大正期の囚人墓地が多数発見されている〔熊大埋 C 報 2018〕。

（田中・森次）



第2図 熊本大学構内黒髪南地区調査地点分布図（龍神橋移設前）

一 位置と環境

第1表 熊本大学構内黒髪南地区調査地点一覧表

調査地点	時期	出土遺構	出土遺物	文献
9412	奈良・平安・近世・縄文後期	竪穴住居址、集石遺構、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦 「國」銘土製印	熊大埋C報 2003
9501	奈良・平安・近世・縄文後期	竪穴住居址、溝	土師器、須恵器、縄文土器	熊大埋C報 2003
9512	奈良・平安・近世・縄文後期	竪穴住居址、溝	土師器、須恵器、縄文土器	熊大埋C報 2003
9516	縄文～古代	柱穴	縄文土器片、古代土師器	熊大埋C報 2003
9603	奈良・平安	竪穴住居址、溝状遺構 掘立柱建物、土壇	縄文土器、古代土師器、古代須恵器、瓦	熊大埋C報 2008
9704	弥生・奈良・平安・近世	甕棺墓、竪穴住居址、溝 掘立柱建物、墓	弥生土器、鉄器、甕棺 土師器、須恵器	熊大埋C報 2008
9810	縄文・奈良・平安・中世 近世	竪穴住居址、溝、ピット 土坑	縄文土器、縄文石器、古代土師器 須恵器、中世磁器、近世陶磁器	熊大埋C報 2009
9907	縄文	土壇	縄文土器	熊大埋C報 2010a
9909	近世	畝、近世墓	近世陶磁器、釘、煙管、銅銭	熊大埋C報 2010a
9911	縄文・古代・近世	溝状遺構	縄文土器、縄文石器、土師器 須恵器、近代陶磁器	熊大埋C報 2014
0102	縄文	風倒木痕、防空壕	縄文土器	熊大埋C報 2010a
0204	縄文・古墳・古代	竪穴住居址、火葬墓坑	縄文土器、土師器、須恵器	熊大埋C報 2014
0206	縄文・弥生・近世	溝状遺構	甕棺	熊大埋C報 2014
0210	縄文・古代	竪穴住居址	縄文土器、縄文石器、土師器 須恵器	熊大埋C報 2014
0302	縄文・古代	溝、土坑、ピット	縄文土器、縄文石器、古代土師器 鉄鏃	熊大埋C報 2011
0513	縄文・古代	竪穴住居址、溝、溝状遺構 土壇、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器 陶磁器	熊大埋C報 2010b
0612	古代	竪穴住居址、柱穴、溝	土師器、須恵器、動物骨	熊大埋C報 2010b
0703	古代	竪穴住居址、土壇	土師器、須恵器	熊大埋C報 2010b
0806	古代	竪穴住居、溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、縄文土器、石器	熊大埋C報 2017
0809	古代	竪穴住居、溝	土師器、須恵器	熊大埋C報 2017
0932	古代	溝	古代土師器、須恵器	熊大埋C報 2011
0938	縄文	溝	縄文土器、弥生土器	熊大埋C報 2011
1121	縄文・弥生・古代・中世 近現代	住居址？、土坑、溝、溝状遺構、 ピット、土坑状遺構、畑址	甕棺、縄文土器片、土師器片 須恵器片、黒曜石片	熊大埋C報 2013
1309	近世・近代	畑址、墓	蔵骨器、陶磁器、ガラス瓶 面子、銭、鉄製品、数珠	熊大埋C報 2018
1310	縄文・古代・中世・近世 近代	墓、人骨、竪穴住居、溝、土 坑、ピット、栗石基礎	縄文土器、土師器、須恵器 陶磁器、石製品、ガラス製品	熊大埋C報 2019 熊大埋C報 2021

二 調査経過

1. 過去の調査

調査地点の立地 本調査地点は、黒髪町遺跡群内の熊本大学構内黒髪南地区に所在する。現在は理学部生物科学コースの研究実習用の畑であるが、1936（昭和11）年頃の熊本高等工業学校の寄宿舎「工友寮」東寮の北側にあたり、大学構内で最も白川に近い場所となっている。

調査地点周辺の過去の調査 本調査地点の周辺では熊本大学埋蔵文化財調査センターによる9810・9907・9911・0938・1310 調査地点の5回の発掘調査が行われている（第3図）。各地点の調査結果の概要について以下説明する（第1表）。

9810 調査地点は1998（平成10）年の理学部実験棟新営工事に伴って調査された。報告書〔熊大埋C報 2009〕によれば、主に7世紀末～9世紀前半のものとされる20基以上の竪穴住居址などの古代遺構群や、土師器や須恵器、縄文土器および石器などの遺物160点以上が検出されている。縄文時代から近世にかけて幅広い年代の遺構・遺物が多数確認されていることから、当調査地点および周辺地区が黒髪町遺跡群の中心的集落であったことが指摘されている〔熊大埋C報 2009〕。

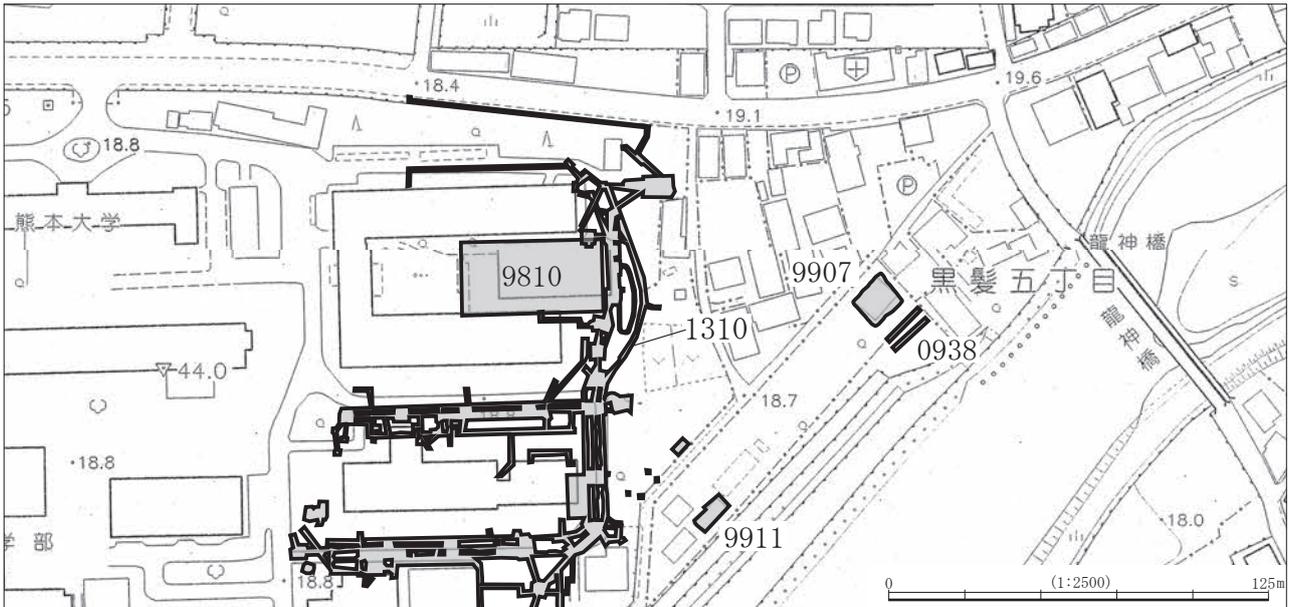
9907 調査地点は1999（平成11）年に工学部実験用プレハブの新設工事に伴って発掘調査が行われた。当調査地点は工友寮の建設と解体・整地によって攪乱を受けたとみられ、地山の遺構検出面までが現代埋土であった。10個のピットと旧河川敷へつなるとみられる落ち込みが確認され、遺物は主に縄文時代後晩期の土器片が出土した。当調査地点は地表面下50cmで地山層になるなど、遺物包含層のレベルが高く後世の土地利用による改変を受けやすい状態であるため、縄文時代中期以前の遺物はさらに白川側の低地にあると推定される〔熊大埋C報 2010a〕。

9911 調査地点は、2000（平成12）年の水生動物飼育舎新営に伴って調査が行われた。当調査地点は先述した9907地点からさほど離れていないにもかかわらず、遺構面および基盤層の深さが大きく異なっており、土層は白川に向かって急激に傾斜しているとみられる。北西側の台地上の部分では古代の遺物包含層は削平されて残っておらず、近世以降の埋土の直下に地山層があった。地山層からは早期の縄文土器や石器が出土したが遺構の検出はなかった。また、地山下の基盤層からは縄文土器を含むピットが検出されているが、おそらく自然の窪みとされており、この他遺構らしいものはなかった。工友寮の工事・整地に伴って、基盤層付近の深さまで遺構面や遺物包含層が削平を受けたと考えられる〔熊大埋C報 2014〕。

0938 調査地点は、理学部エコロジーシステム実験室のアース設置工事に伴って2つのトレンチを設定して調査が行われた。地表下50～60cmで暗褐色の遺物包含層が確認され、その中から縄文土器片数点が出土した。遺構としては深さ80cmの断面V字形の1号溝と、東西方向に走る幅80cm深さ20cmの断面U字形の2号溝が検出された。また、遺物は調査区の南部隅に偏って縄文後期前葉の土器およそ120点が出土しており、傾斜の低い部分に集中する傾向があるとみられている〔熊大埋C報 2011〕。

1310 調査地点は、給水設備等の工事に伴って調査が行われた。調査では、地山と想定されていた土層の下部から出水式土器や御手洗A式土器などが含まれる縄文時代後期前葉の文化層が発見されている。また、同調査で配石墓に埋葬された縄文人骨が3体発見され、1310調査地点の周辺が墓域であった可能性が指摘されている〔熊大埋C報 2013〕。 (大道)

二 調査経過



第3図 調査地点周辺の既往調査

2. 今回の調査

調査に至る経緯 2019年末に発生した新型コロナウイルス感染症は瞬く間に全世界に広がり、今もなお多くの感染者が出ている。影響は多分野にわたり、当研究室も例外ではない。例年であれば夏季の発掘実習では遠方の調査地で合宿し発掘を実施していたが、昨年度はそれを断念し、熊本大学付近にある立田山南麓古墳（上）を調査した。本年度も同様に、合宿を避け、自宅からの通いで調査を実施できるフィールドとして熊本大学構内遺跡を選定した。

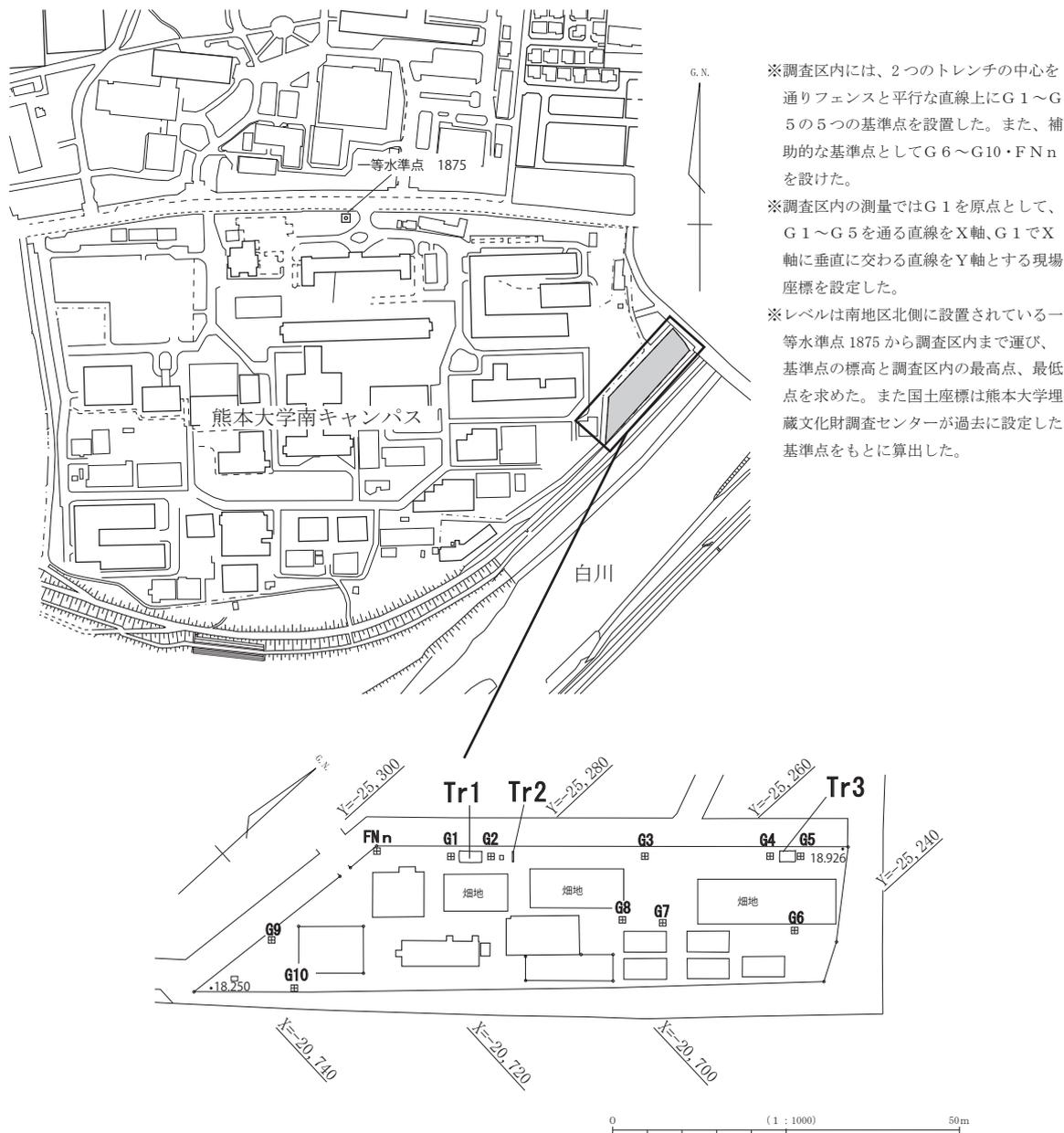
調査の概要 発掘調査は2021年9月13日～23日にかけて行った。熊本大学埋蔵文化財調査センターの過去の調査区と並ぶようにして、白川に沿う位置に試掘トレンチを2ヶ所設けた。トレンチの名称は西側から第1、第2トレンチとした。試掘段階で第2トレンチからは砂が大量に確認され、周辺がかって貯水槽であったとする情報から、この砂層が現代の攪乱層にあたると判断してそれ以上の掘削を断念した。その後、第1トレンチは本格的なトレンチに拡張した。30cmほど掘り下げた段階で暗褐色の層が検出され、地山ではないかと考えた。しかし熊本大学埋蔵文化財調査センターによる1310調査地点の調査結果から、基盤層であるシルト層下面にも文化層が存在する可能性が想定された。そのためさらに掘り進めたが、時間の関係から硬質の砂層が検出された段階で発掘を止めた。

第1トレンチを調査すると同時に、調査区東側に第3トレンチを設けた。当調査区に近接する9907調査地点で縄文時代後・晩期の縄文土器片が[熊大埋C 2010]、0938調査地点で縄文時代後期前葉の土器片が出土しており[熊大埋C 2011]、当調査区でも関連する遺物が出土すると考えられたためである。第3トレンチからは縄文土器片を含むピットが検出された。また、第1トレンチと共通する土層が確認され、当調査区全体における基本土層は同じであると判断した。

発掘と並行して座標点の移動を行った。標高の基準は熊本大学構内におかれた一等水準点1875とした。座標は過去の調査で熊本大学埋蔵文化財センターが設定した点をもとに、国土座標を算出している。また現場測量図には調査区周辺の遊歩道や橋げたの一部を含めている。

なお、現地説明会は感染症対策の観点から聴衆を集めることは困難と判断し、学生が説明する様子を動画に撮影し配信した。

(松岡)



第4図 調査地点測量図

第2表 当調査地基準点の現場座標

点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
FAN	-10.649	-0.809	18.777	調査後撤去
G1	0.000	0.000	18.752	調査後撤去
G2	5.786	0.000	18.736	調査後撤去
G3	27.97	0.000	18.869	調査後撤去
G4	46.049	0.004	18.968	調査後撤去
G5	50.484	0.000	18.994	調査後撤去
G6	49.59	10.725	18.911	調査後撤去
G7	30.576	9.666	18.957	調査後撤去
G8	24.72	9.228	18.940	調査後撤去
G9	-25.913	12.037	18.610	調査後撤去
G10	-22.604	19.017	18.540	調査後撤去

第3表 当調査地基準点の国土座標

点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
FAN	-20712.23	-25293.323	18.777	調査後撤去
G1	-20704.868	-25285.581	18.752	調査後撤去
G2	-20700.566	-25281.712	18.736	調査後撤去
G3	-20684.071	-25266.877	18.869	調査後撤去
G4	-20670.624	-25254.794	18.968	調査後撤去
G5	-20667.332	-25251.822	18.994	調査後撤去
G6	-20675.209	-25244.416	18.911	調査後撤去
G7	-20688.609	-25257.942	18.957	調査後撤去
G8	-20692.632	-25262.203	18.940	調査後撤去
G9	-20732.207	-25293.884	18.610	調査後撤去
G10	-20734.394	-25286.497	18.540	調査後撤去

三 トレンチの概要

1. 第1トレンチ (第5図)

第1トレンチは、縄文時代の土層・遺物を検出することを目的として調査区西側に設定したトレンチである。最初に幅1.5 m、長さ0.2 mの小トレンチを試掘した後、これを拡張して本格的な調査に入った。最終的な規模は幅1.63 m、長さ3.29 mで、トレンチ西端は測量基準点G1より東に約1.30 mの地点に位置する。

第1トレンチの土層は表土を第1層とした場合、全部で9層ある。第2～9層は大きく分けると、現代の攪乱層(第2～6層)と文化層(第7～9層)に二分することができる。

現代の攪乱層である第2～6層は全体的にしまりがやや良く、粘性の弱い層となっている。これらの層は何らかの工事の際に形成されたものであると考えられる。第2層はにぶい黄橙色の土層で、約1 cmのコンクリートやレンガの塊を含む。また本層の下位には、その下に電線パイプがあることを警告する帯状のビニールシートが敷かれている。第3層は黄褐色土層で、第2層のビニールシートで警告されていた電線パイプが通っているほか、約1～5 cmの礫や瓦を含む。第4・5層はそれぞれ褐色土層とにぶい黄褐色土層で、ともに約1 cmのコンクリートの塊や礫を含む。第6層は灰黄褐色土層で、約1 cmのコンクリートの塊や礫のほか、レンガを含む。

第7～9層については、本調査地点に近い1310調査地点の調査成果が報告されている『熊本大学構内遺跡発掘調査報告14』[熊大埋C報 2019]の土層に関する記述を参照した。まず、第7層は古代～近代の遺物包含層であると考えられる。暗褐色土層で、しまりはやや良く、粘性はこの層の上に堆積する第5層に比べて強い。第8層は縄文時代後期前葉の遺物包含層であると考えられる。暗褐色砂層で、しまりはやや良く、粘性はほとんどない。第7層と接する面に見られた小さな窪みからは碗と瓦の破片が出土している。第9層は淡黄色の硬質砂層で、しまりは非常に良く、粘性はない。

(追立)

2. 第3トレンチ (第6図)

第3トレンチは、縄文時代の土層・遺物を検出することを目的として設定したトレンチである。第3トレンチに先行して、調査区の西側に第1・2トレンチを設定したが、攪乱層が多くを占めており、縄文時代の遺物は出土しなかった。そこで、以前の調査で縄文時代の遺物を検出している龍神橋に近い調査区東側に第3トレンチを設定した。規模は、幅1.63 m、長さ2.31 mで、トレンチ西端は測量基準点G1より西に約47.5 mの地点に位置する。

土層は、表土を第1層とした場合、現代の攪乱層(第2・3層)と文化層(第4～6層)に大きく二分される。

第2・3層は、現代の攪乱層であり、第4～6層を切るかたちで堆積している。第2層は、トレンチ中央部に縦に長く存在する。暗褐色の土層に灰白色の砂塊が多量に混在する土層で、しまりが悪く、粘性がやや強い。下部には金属製のパイプが通っている。第3層は、3 mm以下の粒子で構成される灰白色の砂層でしまりは悪く、粘性は極めて弱い。南壁側に塩化ビニル製のパイプが通っている。

第4層は、古代～近代の文化層と考えられる。この土層は粒子が細かく、しまりが悪い暗褐色の層

である。粘性がやや強く、地表付近は脆い。トレンチ東側には、地表から 10cm の地点にコンクリートの層が存在し、北壁にはコンクリート片を確認した。第 5 層は、縄文時代後期前葉以降に堆積したと考えられる砂層である。しまりが悪く、暗褐色で、粘性は極めて弱い。調査区周辺の過去の調査の土層と照らし合わせると、弥生時代以降の層は後世に削平されたと考えられる。第 6 層は、しまりが良く、粘性は極めて弱い淡黄色の硬質砂層で、白川の堆積砂層とみられる。この層は、本来地山と考えられてきた層である。

遺構は、トレンチ東側第 5・6 層にかけて直径約 20cm のピット 1、南側に直径約 10cm のピット 2 を検出した。遺物は、ピット 1 から縄文土器片と須恵器片が各 1 点ずつ出土した。(川元)

3. 小結

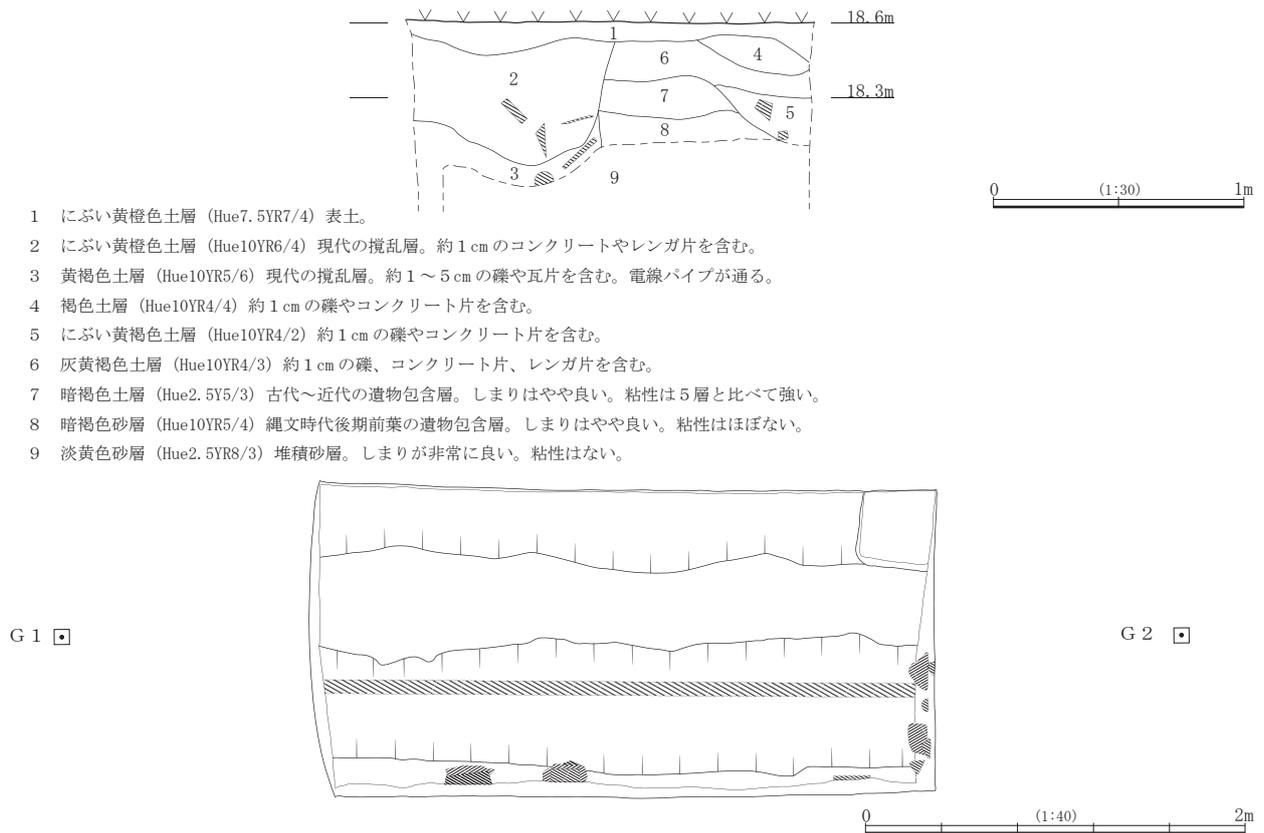
第 1 トレンチと第 3 トレンチの調査結果から、両トレンチの土層は互いに対応しており、表土層と現代の攪乱層を除けば、

- ① 古代～近代の遺物包含層とみられる暗褐色土層
- ② 縄文時代後期前葉の遺物包含層とみられる暗褐色砂層
- ③ 淡黄色の硬質砂層

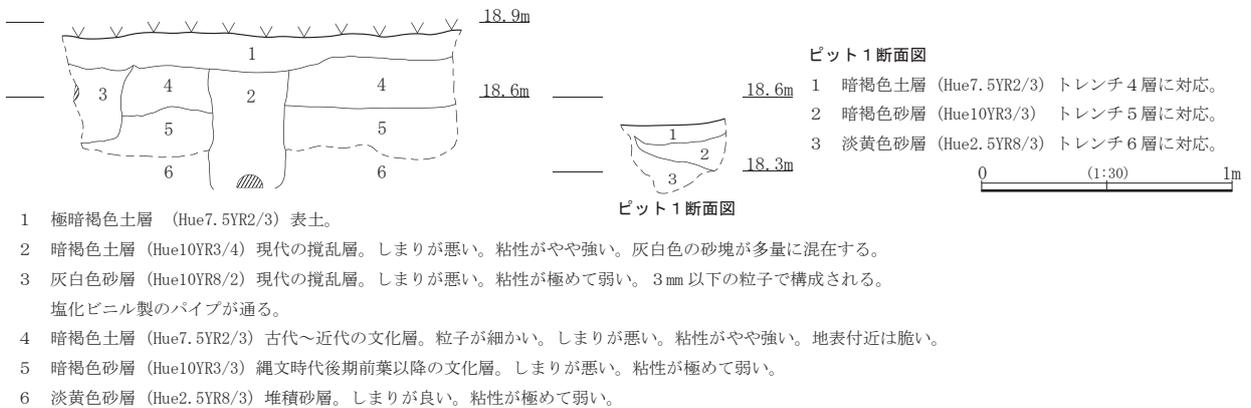
の 3 層に分けることができる。①古代～近代の遺物包含層は第 1 トレンチの第 7 層と第 3 トレンチの第 4 層、②縄文時代後期前葉の遺物包含層は第 1 トレンチの第 8 層と第 3 トレンチの第 5 層、③淡黄色の硬質砂層は第 1 トレンチの第 9 層と第 3 トレンチの第 6 層が対応している。

本調査地点に近い 1310 調査地点の土層に関する記述と比較する。1310 調査地点の第 1 層は表土で、その下の第 2 層は 1953 (昭和 28) 年 6 月の白川大水害によって堆積した砂層となっているが、本調査地点ではこの第 2 層と対応するものは確認されていない。本調査地点は白川に近い場所に位置するため本来ならばこの層と同じものが見られるはずであるが、攪乱層の中には第 1 トレンチ・第 3 トレンチともにパイプが通っていることから、おそらく第 2 層にあたる層はその配管工事の際か、あるいはそれ以前に掘削されたものとみられる。続いて第 3 層は近世・近代の遺物包含層、第 4 層は古代の遺物包含層となっており、これらは本調査地点における①古代～近代の遺物包含層に相当すると考えられる。ただし、1310 調査地点のように古代の層と近世・近代の層を明確に分けることができなかつたため、古代の層は工学部寮建設時に削平されてほとんど残っていない可能性が考えられる。第 5 層は白川によって堆積した自然堤防の上層部で、縄文時代後期前葉の遺物包含層である。この層は砂質ブロックを挟んで 5a 層と 5b 層に分かれている。熊本大学埋蔵文化財調査センターの山野ケン陽次郎助教の指摘によると、5a 層が本調査地点における②縄文時代後期前葉の遺物包含層、砂質ブロックが③淡黄色の硬質砂層に相当し、このさらに下層には 2013 (平成 25) 年度 1309 地点の調査で縄文人骨が出土した土層が存在する可能性があると考えられる。(追立)

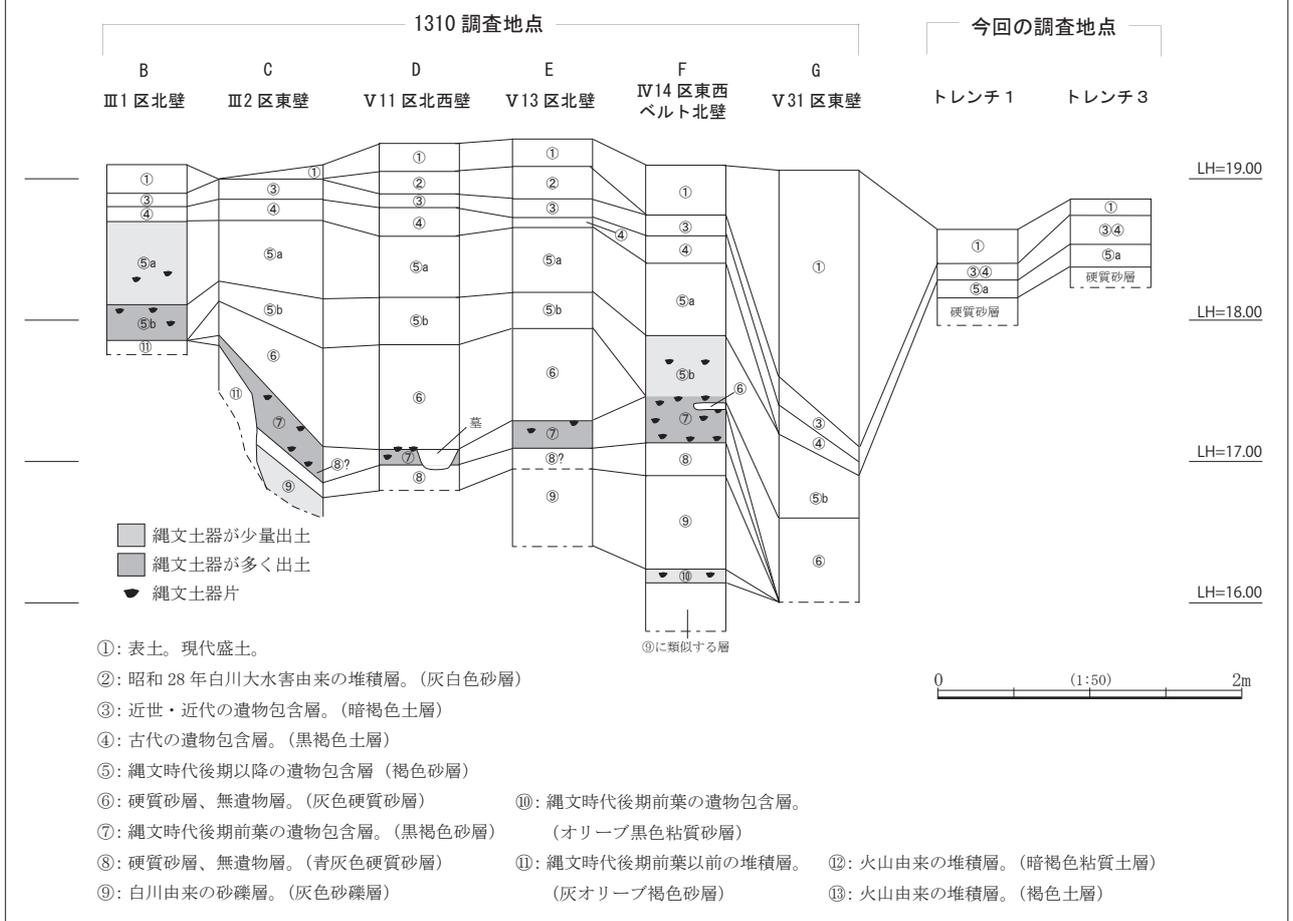
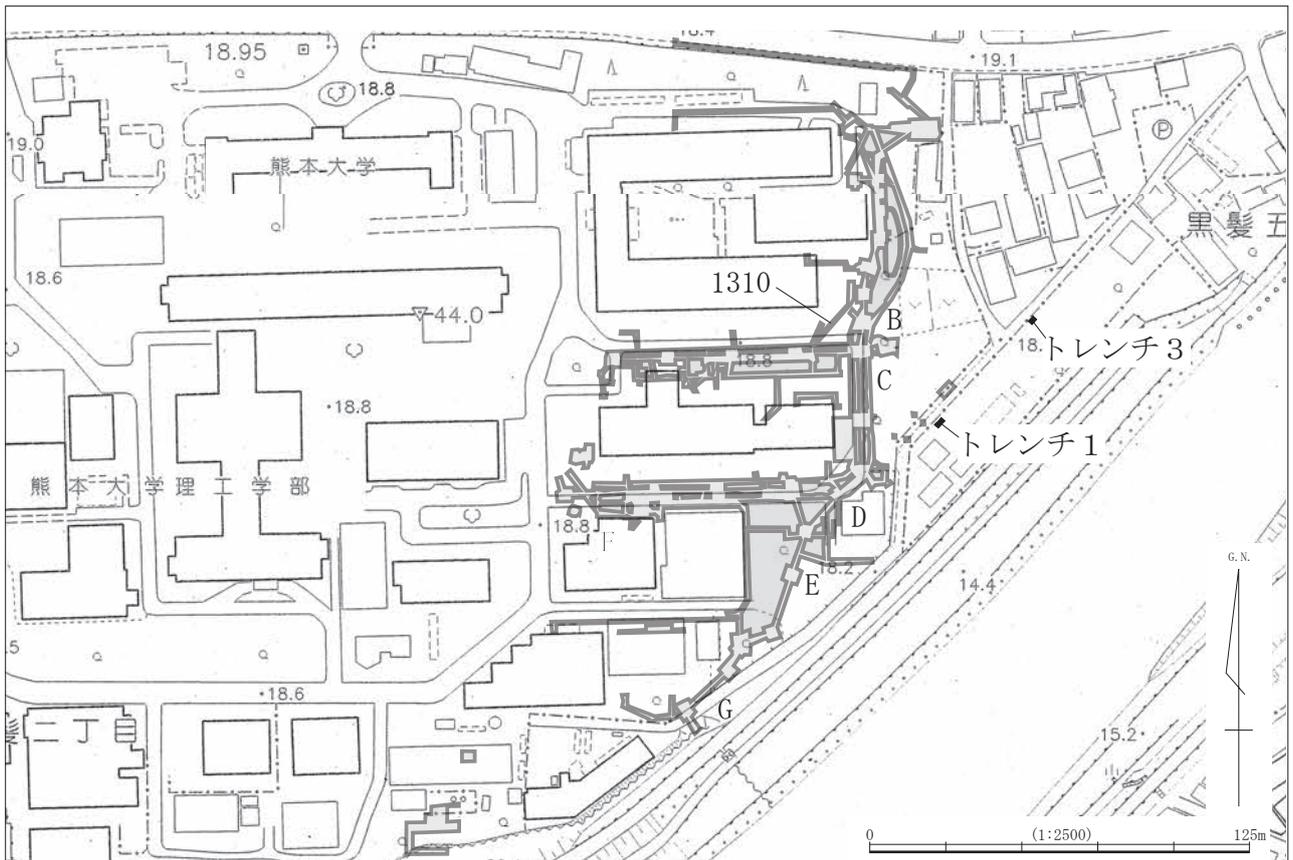
三 トレンチの概要



第5図 第1トレンチ坑断面図・平面図



第6図 第3トレンチ坑断面図・平面図・ピット坑1断面図



第7図 当調査地点周辺の層序と周辺調査地点の層序対応図 (柱状図は熊大埋C報 2019の図4を改変)

四 遺物

第1トレンチ（第8図）

ここでは今回の発掘調査で第1トレンチから出土した8点の遺物について報告する。出土した遺物は土師器1点、陶磁器3点、瓦1点、ガラス瓶2点、缶1点である。

土師器（1） 1は黄褐色を呈し、外面には不定方向の沈線がある。

陶磁器（2～4） 2、3は碗の底部である。2の内面は灰白色、外面はオリーブ褐色を呈す。底径は4.0cmであり、内側のみ釉薬がかけられる。3は明緑灰色を呈す。底径は4.8cmである。唐草模様と思われる模様が外面に入る。4は皿の底部であり、灰白色を呈す。底径は9.8cmである。内面底部には桜の図柄が描かれている。

瓦（5） 5は灰白色を呈す。

ガラス瓶（6～7） 6、7はどちらもほぼ完形で見つかった。6は無色透明を呈し、法量は口径1.8cm、底径4.0cm、器高19.7cmである。表面に「ファンタ 登録商標」と書かれたシールと「Fanta 登録商標」と書かれたシールが貼られている。シールの下には「BOTTED UNDER AUTHORITY OF THE COCA-COLA COMPANY 200ml」の文字がプリントされており、これは1971（昭和46）年に製作されたものであると考えられる。また、底部から2.5cmの位置に「35 TO 71」の陽刻があり、文字列の周囲2.6cm×0.5cmはくぼんでいる。このくぼみは印刷がずれないためのラグ・ディンプル（へそ）である。加えて、底面にはナーリングと金型の合わせ目がある。7は透明で、淡い青緑色を呈す。法量は口径3.7cm、底径6.2cm、器高6.6cmである。一部に気泡を含み、口部には至らないものの金属の合わせ目が存在する。また、裏底に桜の形と「不（旧字体）易糊」の文字が陽刻されている。ガラス瓶の不易糊は、明治30年代～大正年間まで販売されていたものである。

缶（8） 8の大部分はサビで覆われているが、かろうじて「GEORGIA」の文字を読み取ることができ、コカ・コーラ株式会社のコーヒー飲料の缶であることが分かる。GEORGIAの缶製品は1975（昭和50）年6月から製造販売が開始されている。小口面には飲み口が認められる。

第3トレンチ（第9図）

ここでは今回の発掘調査で第3トレンチから出土した21点の遺物について報告する。出土した遺物は縄文土器1点、須恵器3点、土製品2点、陶磁器6点、瓦4点、ガラス瓶4点、豆電球1点である。

縄文土器（9） 9は黄褐色を呈する。

須恵器（10～12） 10は橙色を呈し、内外面にナデが施される。11の内面は灰黄褐色、外面は黒褐色を呈す。また、外面に光沢があり、稜線が数本存在する。12は灰色を呈す。内面にナデと不定方向ナデ、外面にナデが施される。

土製品（13～14） 13は黄褐色を呈し、内外面にナデが施される。14の内面は黄褐色、外面はにぶい黄橙色を呈す。内面に不定方向ナデ、外面にケズリが施される。

陶磁器（15～20） 15は白色を呈す。内面には青の染付で線が描かれており、外面には底部を含め青の染付が施される。16は皿である。白色を呈し、器高は2.4cmである。口縁部は薄い青で染付されており、その上を0.1cmの間隔で濃い青の模様が存在している。17は口縁部であり、灰白を呈す。口径は14.4cmで、内面に青の2本線の模様、外面に縦縞が存在する。18は灰色を呈す。口縁

部であり、口径6.4cmである。19は白色を呈す。底部であり、底径4.5cmである。外面に青線の模様が存在する。20の表面は黒色、裏面は黒褐色を呈す。

瓦 (21～24) 21は暗青灰色を呈し、表面に沈線が存在する。22は暗灰色を呈す。21と同じく表面に沈線が存在する。21と22は同一個体と考えられる。23の表面は暗青灰色を呈す。24は黄灰色を呈し、表面に沈線がある。

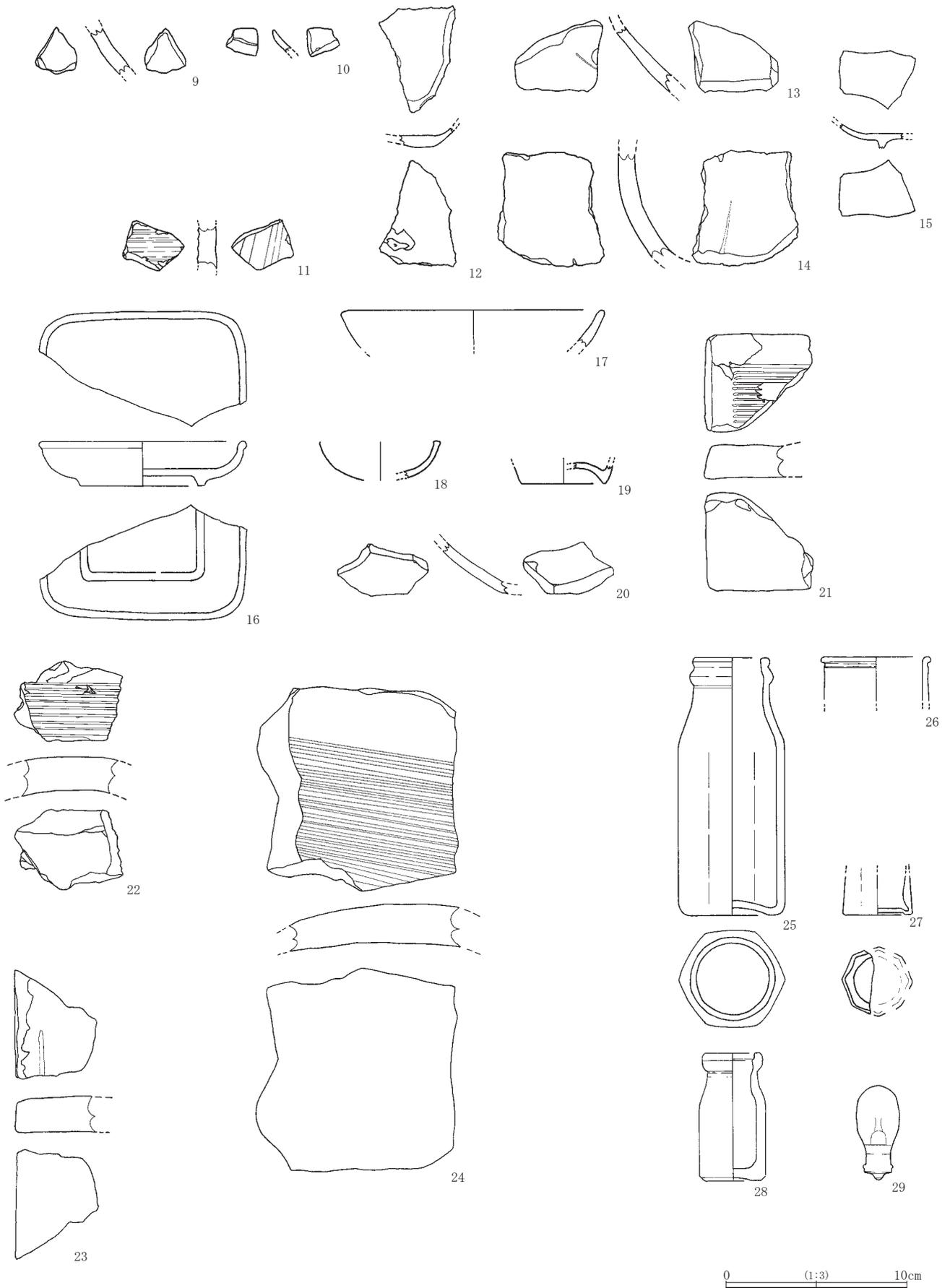
ガラス瓶 (25～28) 25・26・28は無色透明を呈す。25は完形で出土した。25の法量は口径4.2cm、底径4.0cm、器高14.1cmである。胴部中ほどは六角形であり、口縁や底面は円形を呈す。外面底部中央には円で囲まれた星の陽刻がある。また、一部では銀化（虹彩）がみられる。外面下端に「5」の陽刻がある。さらに、金属の合わせ目、底われやうすい首しわも存在する。26は口縁部であり、口径は6.0cmである。27は青色透明を呈す。底部であり、底径は3.8cmである。底面は八角形であり、微細な気泡を含む。28の法量は底径3.0cm、口径3.1cm、器高7.0cmである。また金型の合わせ目と首しわ、下部には「4A」の記号と菱形に囲まれた「S」の記号、底部には「0-4」の記号が存在する。

豆電球 (29) 29は完形で出土した。中にガラス片を含む。 (岡本)



第8図 熊本大学構内黒髪南地区出土遺物実測図(1)

四 遺物



第9図 熊本大学構内黒髪南地区出土遺物実測図(2)

第4表 熊本大学構内黒髪南地区出土遺物一覧表

図	No.	遺物	器種	法量 (cm)	残存率	調整		色調		焼成	出土遺構	備考
						内：— 外：不定方向の沈線	内：Hue10YR5/6 黄褐 外：Hue10YR5/6 黄褐					
8	1	土師器?	—	—	破片	内：— 外：不定方向の沈線	内：Hue10YR5/6 黄褐 外：Hue10YR5/6 黄褐	良好	第1Tr			
	2	陶磁器	碗	口径：— 底径：4.0 器高：—	5%	内：施釉 外：—	内：Hue7.5Y8/2 灰白 外：Hue2.5Y4/4 オリーブ褐	良好	第1Tr			
	3	陶磁器	碗	口径：— 底径：4.8 器高：—	20%	内：— 外：—	内：Hue7.5GY8/1 明緑灰 外：Hue7.5GY8/1 明緑灰	良好	第1Tr		外面に唐草模様と思われる模様	
	4	陶磁器	皿	口径：— 底径：9.8 器高：—	10%	内：— 外：—	内：Hue7.5Y8/2 灰白 外：Hue7.5Y8/2 灰白	良好	第1Tr		内面底部に桜柄の染付	
	5	瓦	—	—	—	内：— 外：—	内：Hue5Y5/1 灰白 外：Hue5Y5/1 灰白	良好	第1Tr			
	6	ガラス製品	瓶	口径：1.8 底径：4.0 器高：19.7	完形	内：— 外：—	内：— 外：—	—	第1Tr		無色透明 外面にファンタのラベル 下部に陽刻	
	7	ガラス製品	瓶	口径：3.7 底径：6.2 器高：6.6	ほぼ完形	内：— 外：—	内：— 外：—	—	第1Tr		青色透明 底部に桜と不易糊の陽刻	
	8	アルミ製品	缶	—	90%	内：— 外：—	内：— 外：—	—	第1Tr		表面はほぼサビで覆われる 小口面に飲み口と思われる穴 コーヒー缶と思われる	
9	9	縄文土器	—	—	破片	内：— 外：—	内：Hue2.5Y6/6 明黄褐 外：Hue2.5Y5/6 黄褐	良好	第3Tr ピット1			
	10	須恵器	—	—	破片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue7.5YR7/6 橙 外：Hue7.5YR7/6 橙	良好	第3Tr ピット1			
	11	須恵器?	—	—	破片	内：— 外：—	内：Hue10YR5/2 灰黄褐 外：Hue2.5YR3/1 黒褐	良好	第3Tr			
	12	須恵器	—	—	15%	内：ナデ、不定方向ナデ 外：ナデ	内：Hue5Y6/1 灰 外：Hue5Y5/1 灰	良好	第3Tr			
	13	土製品	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue2.5Y5/6 黄褐 外：Hue2.5Y5/4 黄褐	良好	第3Tr			
	14	土製品	—	—	—	内：不定方向ナデ 外：ケズリ	内：Hue2.5Y5/4 黄褐 外：Hue10YR6/4 にぶい黄橙	良好	第3Tr			
	15	陶磁器	—	口径：— 底径：— 器高：—	—	内：— 外：—	内：9/0 白 外：9/0 白	良好	第3Tr		外面に青色の2本線の染付	
	16	陶磁器	皿	口径：— 底径：— 器高：2.4	—	内：— 外：—	内：9/0 白 外：9/0 白	良好	第3Tr		口縁に青色の染付	
	17	陶磁器	—	口径：14.4 底径：— 器高：—	5%	内：— 外：—	内：9/0 白 外：9/0 白	良好	第3Tr		外面に緑色の縦縞 内面に青色の2本線の染付	
	18	陶磁器	—	口径：6.4 底径：— 器高：—	—	内：— 外：—	内：Hue5YR4/1 灰 外：Hue5YR4/1 灰	良好	第3Tr			
	19	陶磁器	—	口径：— 底径：4.5 器高：—	—	内：— 外：—	内：9/0 白 外：9/0 白	良好	第3Tr			
	20	陶磁器	—	口径：— 底径：— 器高：—	—	内：— 外：—	内：Hue10YR2/1 黒 外：Hue10YR3/1 黒褐	良好	第3Tr			
	21	瓦	—	—	—	内：— 外：沈線	内：Hue5B3/1 暗青灰 外：Hue5B3/1 暗青灰	良好	第3Tr			
	22	瓦	—	—	—	内：— 外：沈線	内：HueN3/0 暗灰 外：HueN3/0 暗灰	良好	第3Tr			
	23	瓦	—	—	—	内：— 外：—	内：HueN6/ 灰 外：Hue5B3/1 暗青灰	良好	第3Tr			
	24	瓦	—	—	—	内：— 外：沈線	内：Hue5Y5/1 黄灰色 外：Hue5Y5/1 黄灰色	良好	第3Tr			
	25	ガラス製品	瓶	口径：4.2 底径：4.0 器高：14.1	完形	内：— 外：—	内：— 外：—	—	第3Tr		無色透明 底部に○と☆の陽刻 下部に「5」と陽刻 胴部は六角形	
	26	ガラス製品	—	口径：6.0 底径：— 器高：—	—	内：— 外：—	内：— 外：—	—	第3Tr		無色透明	
	27	ガラス製品	瓶	口径：— 底径：3.8 器高：—	—	内：— 外：—	内：— 外：—	—	第3Tr		青色透明 底面は八角形 微細な出来泡を含む	
28	ガラス製品	瓶	口径：3.1 底径：3.0 器高：7.0	—	内：— 外：—	内：— 外：—	—	第3Tr		無色透明 底部に「0-4」の記号 下部に「4A」と「菱形に囲まれたS」の記号		
29	豆電球	—	縦：5.2 横：2.3	完形	内：— 外：—	内：— 外：—	—	第3Tr				

五 総括

本年度は黒髪町遺跡群熊本大学構内南地区の発掘・測量調査を行った。調査で得られた情報を整理し、以下にまとめた。

出土遺物について 本年度の調査では、ピットから土器片が2点出土している。土器片は胎土から縄文土器および須恵器と考えられるが、詳細な時期を決定できるほどの特徴は認められなかった。

それらを除くと、近現代の遺物が目立つ。陶磁器に小破片が多く、製作時期が分かるようなものはなかった。いずれも大型のものではなく、日常的に使用される小皿や椀が中心である。

層序について 今回の調査によって、熊本大学構内黒髪南地区の白川付近における基本層序の連続性がみとめられた。古代～近代の遺物包含層、縄文時代後期前葉の遺物包含層の下位に淡黄色の硬質砂層が分布する層序は、1310 調査地点の層序と共通する。また、第3トレンチで検出された硬質砂層は間隙を多く含み、これが1310 地点で確認された2枚の縄文時代後期前葉の遺物包含層の間に挿入される砂層である可能性が示唆された。このことから、今回の調査では到達できなかったが、当該調査地点の下層にはさらに縄文時代後期前葉の遺物包含層が白川由来の硬質砂層と交互に存在する可能性がある。(松岡)

参考文献

- 1 熊本大学埋蔵文化財調査室 2003『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅰ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第1集
- 2 熊本大学埋蔵文化財調査室 2008『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅳ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第4集
- 3 熊本大学埋蔵文化財調査室 2009『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅴ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第5集
- 4 熊本大学埋蔵文化財調査室 2010a『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅵ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第6集
- 5 熊本大学埋蔵文化財調査室 2010b『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅶ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第7集
- 6 熊本大学埋蔵文化財調査センター 2011『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅷ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第8集
- 7 熊本大学埋蔵文化財調査センター 2013『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅸ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第9集
- 8 熊本大学埋蔵文化財調査センター 2014『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅹ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第10集
- 9 熊本大学埋蔵文化財調査センター 2017『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅺ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第12集
- 10 熊本大学埋蔵文化財調査センター 2018『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅻ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第13集
- 11 熊本大学埋蔵文化財調査センター 2019『熊本大学構内遺跡発掘調査報告14』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第14集
- 15 熊本大学埋蔵文化財調査センター 2021『熊本大学構内遺跡発掘調査報告16』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第16集
- 16 熊本県ホームページ 危機管理防災課『昭和28年6月26日水害』
昭和28年6月26日水害 - 熊本県ホームページ (pref.kumamoto.jp)
(2021年12月19日アクセス)